

中学校技術・家庭科（家庭分野）における体験的な学習活動の効果

—— 幼児との関わり方を考え工夫する授業を目指して ——

速水 多佳子*, 玉城 千裕**, 福井 ともこ***

(キーワード: 家庭科, 保育領域, ロールプレイング, 体験的な活動)

I 研究の背景

わが国の総人口は、2019年10月1日現在、1億2,617万人である。総人口のピークは2010年の1億2,806万人で、その後、長期の人口減少過程に入っている。人口推計では、2053年には1億人を割って9,924万人、2065年には8,808万人となることを見込まれている（国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」）。2019年現在の15歳未満の年少人口は、1,521万人（総人口に占める割合：12.1%）、15歳から64歳の生産年齢人口は、7,507万人（59.5%）、65歳以上人口は、3,589万人（28.4%）である。世界全域での年少人口の割合（国連推計）は、2019年現在で26.2%であり、日本と同様に合計特殊出生率（15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの）が低い国であるドイツ（13.2%）、イタリア（13.7%）と比較しても、日本の年少人口の割合は、12.1%と低い。日本の年少人口の総人口に占める割合は年々低下しており、2065年には10.2%になると推計されている。わが国の出生数は減少を続け、第1次ベビーブーム期（1947年～1949年）に約270万人、第2次ベビーブーム期（1971年～1974年）に約210万人であったのが、その後100万人を割るようになって、2019年の出生数は86万5,234人であった。このような少子化の進行により、様々な社会問題が引き起こされている。「少子社会の多面的検討特別委員会報告 少子社会の現状と将来を考える」（日本学術会議 平成12年5月29日）によると、少子化の問題点として、「経済成長の低下」、「社会保障給付と負担のアンバランス」、「子どもの成長・発達への影響」等を挙げている。需要と生産力が低下し国の活力が失われ、労働人口減少による経済成長の低下が予想されること、少子化と高齢化の同時進行により、年金、医療、福祉等の社会保障費の現役世代の負担が増大すること、そして、子供同士や異年齢の子供との交流の機会が減少することにより、思いやりや社会性などの健康な心身の発達が阻害されること等が問題とされている。少子社会は、競争社会の緩和や環境に対する負荷の軽減等のメリットもあるが、全般的にはマイナスの影響の方が大きい。

このような少子化をめぐる現状と課題を背景として、政府は1990年代から、エンゼルプラン（1994年）、新エンゼルプラン（1999年）等の少子化対策を推進しており、2003年には「少子化社会対策基本法」が制定された。この法律に基づく少子化に対処するための施策の指針として、2004年に「少子化社会対策大綱」が閣議決定された。そして、2010年（第2次）、2015年（第3次）に続き、2020年5月29日には、第4次の「少子化社会対策大綱～新しい令和の時代にふさわしい少子化対策へ～」が閣議決定されている。この中では、「令和の時代にふさわしい環境を整備し、国民が結婚、妊娠・出産、子育てに希望を見出せるとともに、男女が互いの生き方を尊重しつつ、主体的な選択により、希望する時期に結婚でき、かつ、希望するタイミングで希望する数の子供を持つる社会をつくること」を、少子化対策における基本的な目標としている。全ての結婚・子育て世代が将来にわたる展望を描けるように、経済的基盤の安定、働きやすい環境の整備、子育てに対する支援等の様々な施策の推進体制の強化が図られている。このような政府主導で行われる施策の推進は、少子化対策として不可欠である。しかしその一方で、児童相談所における児童虐待相談対応件数は年々増加しているという実態がある。平成2年度から平成30年度までの相談対応件数の推移を見ると、毎年過去最多の件数を更新しており、虐待相談の内容別件数では心理的虐待が最も多く、次いで身体的虐待の割合が多い。「児童相談対応件数の動向について（令和2年1月～5月分（速報値）」によると、やはり前年と比較して相談対応件数が増加傾向にあり、特に令和2年は、

*鳴門教育大学自然・生活系教科実践高度化コース（家庭）

**元鳴門教育大学大学院学校教育研究科

***兵庫県立錦城高等学校

新型コロナウイルス感染症対応による学校休業や外出自粛等に伴って、子供や家庭の生活環境が変化する中での虐待のリスクの高まりが懸念されている。相談件数に含まれていない虐待も多く存在する可能性があり、新型コロナウイルス感染症の影響も含め、多様化する家庭の様々なニーズに応えられるような支援が今後さらに求められる。少子化をめぐる問題には、少子化対策としての施策の推進だけでなく、将来の親となる世代が子供に対する愛情を育んだり、育児に対する知識や技能を身に付けたりすることも必要である。

全ての国民が一定の知識や技能を習得する場となる学校教育の中では、家庭科の学習に、乳幼児の生活や子供との関わり方等に関する内容が含まれている。小学校家庭科では、「A 家族・家庭生活」に関する内容として、地域で共に生活している幼児などの異なる世代の人々との関わりについて扱う。中学校家庭科は、小学校と同じく「A 家族・家庭生活」に関する内容として、幼児の発達と生活の特徴について学び、子供が育つ環境としての家族の役割や幼児との関わり方について扱う。高等学校家庭科は、「A 人の一生と家族・家庭及び福祉」に関する内容として、乳幼児期の心身の発達と生活、親の役割と保育などについて学び、乳幼児と関わるための基礎的な技能を身に付けることを目指している。家庭科では、小学校・中学校・高等学校と発達段階に応じて、子供の心身の発達や子供との関わりについて扱っている。

新学習指導要領（小学校・中学校：平成29年告示，高等学校：平成30年告示）において、家庭科の改訂の要点の中で示されている内容を見ると、小学校は、少子高齢社会の進展に対応して、家族や地域の人々とよりよく関わる力を育成するために、「幼児又は低学年の児童，高齢者など異なる世代の人々との関わりに関する内容を新設している。」とあり、中学校も小学校と同様に少子高齢社会の進展に対応して、「幼児との触れ合い体験などを一層重視するとともに、高齢者など地域の人々と協働することに関する内容を新設している。」と書かれている。高等学校は、共通教科「家庭科」に、「家庭基礎」（標準単位数2単位）と「家庭総合」（標準単位数4単位）の2科目が設けられて、1科目を選択履修することとなっており、「家庭基礎」では、少子化の進展に対応して、「子育て支援，乳幼児と関わるための基礎的な技能」に関する内容が充実され、「家庭総合」では、「子供の遊びと文化，子育て支援，子供の発達に応じた適切な関わり方の工夫など」に関する内容の充実が図られることが、内容の改善として挙げられている。このように家庭科では、少子高齢社会の進展に対応する内容として、学習指導要領の改訂に伴ってこれまで以上に、子供との関わりについて重点的に学ぶこととなっており、特に中学校からは、幼稚園，保育所，認定こども園などの幼児との触れ合いや交流の機会をもつよう求められている。

生徒が幼児と直接的に触れ合う体験実習については、尾城ら(2010)が、家庭科教員を対象にした調査により、生徒を送り出す教員側の不安や困難さ、問題点も多いが、それ以上に効果が高く、実践に参加した生徒だけではなく、受け手側の園の子供や引率教員，幼稚園教諭，保育士のそれぞれが新たな発見をして、成長し合える場となっていることを明らかにしている。また、伊藤(2007)によると、送り手側の家庭科教員と受け手側の幼稚園・保育所の保育者双方の調査から、高等学校よりも中学校の方が触れ合い体験が多く実施されており、生徒の意欲が高いと評価されていること、主として生徒と子供と一緒に遊ぶ体験となっていることを明らかにしている。そして、送り手側からは、生徒の幼児に関する知識の貧困さやうまく遊べない生徒への指導の困難さが挙げられており、受け手側の理解と協力意識が不可欠であり、協働体制の構築が必要であることを強調している。触れ合い体験実習の意義については、考藤ら(2016)が、中学生・高校生は実習を通して、「子ども・子育てに関する意識，子ども像を変化させたり，自己効力感などの自分の意外な一面を知ることにつながったりする」ことを挙げており、家庭科の授業の中で、「系統的に科学としての幼児の発達に関する知識を学習していることが、知識と体験の双方が融合して一層の教育効果をもたらしている」と指摘している。このように、触れ合い体験実習は、送り手側の生徒と受け手側の幼児の双方にとって有意義な活動であり、効果が認められている。しかしその一方で、実際の学校現場では、事前事後指導も含めた触れ合い体験実習の時間を十分に確保できないこと、生徒の人数の多さから、幼稚園・保育所等の受け入れ先の確保が難しいこと、安全・衛生面で不安があること、生徒のマナーや態度に関する指導が困難であること、教員に加重な負担がかかること等の問題から、触れ合い体験実習自体を実施することが困難な場合も見られる。

これまで述べてきたように、わが国の少子高齢社会の進展に伴う現状と課題を背景として、将来の親となる世代に子供と関わる機会を設けて、子供を理解し思いやる心を育てることは必要である。家庭科では、幼稚園や保育所における触れ合い体験実習を実施し、実際に幼児と交流する機会を授業の中に取り入れるよう努めている。しかし状況によっては、触れ合い体験実習を行うことが困難な学校もある。そこで本研究は、学校の事情等で触れ合い体験実習の実施が困難な場合を想定し、その代替となるような体験的な活動を取り入れた授業を考案し、実践によってその効果を検証することにした。また、家庭科における幼児との直接的な触れ合いや交流の体験実

習は、中学校段階から導入されていることから、対象を中学校家庭科の授業とした。

Ⅱ 研究方法

まず、中学校家庭科保育領域の指導内容を確認するために、学習指導要領で示されている内容とその取扱いを整理した。次に、授業実践対象となる中学生の実態を把握するために、これまでの子供との関わり方の経験と子供に対する興味・関心に関するアンケート調査を2018年12月に実施して分析した。対象者は、公立A中学校2年生4クラス129名である。そして、これらを元にして授業を設計し、2019年1月に各クラス1時間（50分間）の授業実践を行ない、授業で使用したプリントと授業後アンケートを分析して、授業の効果を検証した。

Ⅲ 授業設計

1. 学習指導要領

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編』に記載されている保育領域に該当する箇所を以下に示す。幼児の発達と生活、幼児との関わり方に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、それを支える家族の役割や遊びの意義について理解し、幼児との関わり方を工夫することができるようにすることをねらいとしている。

(2) 幼児の生活と家族

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 幼児の発達と生活の特徴が分かり、子供が育つ環境としての家族の役割について理解すること。

(イ) 幼児にとっての遊びの意義や幼児との関わり方について理解すること。

イ 幼児とのよりよい関わり方について考え、工夫すること。

保育領域の内容の取扱いについては、「幼稚園、保育所、認定こども園などの幼児の観察や幼児との触れ合いができるよう留意すること。」と書かれている。指導に当たっては、「身近な幼児と幼児に関わる人々の観察や視聴覚教材の活用、ロールプレイングなどの学習活動を通して具体的に扱うよう配慮する。」と書かれ、幼児との関わり方については、「幼児を観察したり、一緒に遊んだりするなどの直接的な体験を通して、遊びの意義や幼児との関わり方について実感を伴って理解できるよう配慮する。なお、幼児を実際に観察したり、触れ合ったりすることが難しい場合には、視聴覚教材を活用したり、ロールプレイングをしたりする活動などが考えられる。」と示されている。可能な限り、幼児と直接的に触れ合う体験を通して、幼児の発達の状況や関わり方について実感を伴って理解できるようになることを求めている。地域の幼稚園、保育所、認定こども園などと連携し、幼児及び生徒の安全に配慮して効果的に実施できるように工夫することが示され、幼児と触れ合うことの楽しさやよさを実感できるよう配慮するように書かれている。

実際に体験実習を実施するには、地域の実態に応じた触れ合いとなるように留意する必要がある。学校の事情等で体験実習の実施が困難な場合は、代替となる学習活動を取り入れて指導を行うことで、幼児に対する理解が深まるように配慮することが求められている。代替となるような活動の例としては、視聴覚教材の活用とロールプレイングが示されている。幼児と直接的に関わる体験から得る学びに勝るような活動を取り入れるのは困難であると考えられる。しかし、今後、生徒が幼児と直接的に関わる機会に直面した場合には生かすことができるように、直接体験と同様の効果が得られるような授業を考案する必要がある。

2. 生徒の実態

授業対象となる生徒は、これまでに乳幼児との関わりにおいてどのような経験をしているか、また乳幼児に対しての興味・関心の程度はどのような状況にあるのかという実態を把握するために、アンケート調査を実施した。2018年12月にA中学校2年生4クラスを対象とした調査を授業内で実施し、欠席者4名を除いた125名を分析対象とした。

(1) 乳幼児と関わった経験

中学生になってからの乳児や幼児と関わった経験の有無を尋ねたところ、「ある」と回答したのは81名（64.8%）、「ない」と回答したのは42名（33.6%）、無回答は2名（1.6%）であった。関わった経験が「ある」

と回答した81名に対して、どのような関わりをしたかについて具体例を挙げ、重複回答可で尋ねた。その結果、「遊んだことがある」は73名(90.1%)、「一緒にご飯やお菓子を食べたことがある」59名(72.8%)、「話をしたことがある」58名(72.5%)、「赤ちゃんを抱っこしたことがある」は、58名(72.5%)、「一緒に歩いたことがある」55名(67.9%)であった。その他は12名(14.3%)で、おむつを替える、寝かせる、ミルクをあげる等が自由記述で書かれていた。約65%の生徒が中学生になってからの1、2年間に乳幼児との関わりをもっており、遊びや食事を一緒にした経験があることが分かった。

(2) 乳幼児との関わりに対する興味・関心

「乳幼児と関わるのが好きですか」について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で尋ねたところ、「とてもそう思う」40名(32.0%)、「少しそう思う」33名(26.4%)、「どちらともいえない」19名(15.2%)、「あまりそう思わない」7名(5.6%)、「全くそう思わない」7名(5.6%)、無回答19名(15.2%)であった。「とてもそう思う」、「少しそう思う」を合わせると、乳幼児との関わりを肯定的に捉えている生徒が58.4%と半数を超えているが、「どちらともいえない」と「無回答」を選択した生徒が合わせて約3割も見られた。この3割の生徒は、「乳幼児との関わりがあまり好きではない」という意思表示を意味する回答を選択することが憚られたために、「どちらともいえない」や「無回答」となったのではないかと考えられ、そうすると、乳幼児との関わりが苦手であると捉えている生徒が多数存在することになる。また、「乳幼児と関わりたいと思いますか」と5段階で尋ねた結果、「とてもそう思う」33名(26.4%)、「少しそう思う」37名(29.6%)、「どちらともいえない」25名(20.0%)、「あまりそう思わない」7名(5.6%)、「全くそう思わない」8名(6.4%)、無回答15名(12.0%)であった。乳幼児と関わりたいと56.0%の生徒が肯定的に捉えていたが、約半数であった。先ほどの質問の回答と同じ傾向が見られ、「どちらともいえない」と「無回答」を選択した生徒が3割を超える。乳幼児との関わりに対して、抵抗を感じている生徒が少なくないと言える。

乳幼児との関わりについて、上記のように回答した理由を自由記述で尋ねたところ、肯定的な理由としては、「かわいいから」、「一緒に遊ぶと楽しいから」、「小さい子が好きだから」等があり、否定的な理由としては、「うるさいから」、「何をするかわからないから」、「自信がないから」等があった。否定的な理由は、子供と関わった経験の少なさに起因するものと考えられる。最後に、乳幼児に対してどのようなイメージや印象をもって自由記述で尋ねたところ、様々な内容の記述が見られた。肯定的な回答と否定的な回答に分類することができ、プラスのイメージとしては、「小さい、かわいい、元気、笑う」に関連した内容が多く、マイナスのイメージとしては、「泣く、わがまま、うるさい」に関連した内容が多かった。

3. 授業の構成

学習指導要領で示されている学習内容と指導上の留意点、そして生徒の実態調査の結果を考慮し、幼児と直接的な関わりとなる触れ合い体験実習と同様の効果が得られるような授業を考案するために、次の3点に配慮した授業案を作成することにした。

- 乳幼児に対する生徒の興味・関心を引き出す。
- 乳幼児の特徴や関わり方などについて、体験を通して理解できるようにする。
- 幼児の実際の生活で起こると考えられる場面設定を取り入れる。

授業の導入では、生徒の乳幼児に対する興味・関心を引き出す必要があることから、新生児抱き人形に触れる体験を取り入れることにした。新生児抱き人形(体重:約3kg、身長:約50cm)を抱きかかえて、生徒全員で順に受け渡していくという演習であり、乳児の重さや大きさを実感させるとともに、乳児への愛着をもたせることをねらいとした体験である。

学習指導要領には体験的な学習活動の代替となる例として、視聴覚教材とロールプレイングが示されていたことから、本授業では視聴覚教材として、幼児目線の動画の視聴を取り入れることにした。この動画は、幼児が市街地を歩く様子を幼児の目線から撮影したものである。幼児の目には周りがどのように映っているのかを理解することから、どういう点に注意して歩行させる必要があるのか、そして周囲の大人はどのように行動するべきかを考えさせることができる。また、ロールプレイングとして、2つの体験コーナーを設けて幼児体験をさせる。本授業では、横断歩道の場面と遊び場でのおもちゃの取り合いの場面を取り上げる。台(2003)によると、ロールプレイングがねらいとする点は様々で、「コミュニケーションを發展させる」、「自発性に基づいて創造性を伸ばす」、「現実に面と向かせる」、「生活課題解決の手がかりを得る」、「問題場面を動かしている条件を見出す」などがある。本授業ではロールプレイングを通して、幼児とのコミュニケーションの取り方を理解すること、現実

の場面を演じることで、幼児の気持ちや立場を理解すること、そして、幼児に対して周囲はどのように接すればよいかを考えさせることをねらいとした。ロールプレイングで幼児の役を演じる際には、チャイルドビジョン（NPO 法人 CAP センター・JAPAN 発行）を装着することにした。チャイルドビジョンは、幼児の視界体験眼鏡である。幼児の目の高さは大人よりも低く、垂直方向の視界は限られており、水平視野も大人より狭い。チャイルドビジョンを装着することによって、横断歩道での幼児の視界を体験することができ、周囲の人の関わり方の工夫を具体的に考えさせることが可能となる。

IV 授業実践

1. 授業の実際

題材名：幼児との関わりを体験してみよう

授業目標：幼児の発達や生活の特徴を踏まえ、幼児とのよりよい関わり方について理解し、工夫することができる。

授業の展開を表1に示す。

表1 授業展開「幼児との関わりを体験してみよう」

時間	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価
10分	1 新生児抱き人形や教師の説明から、本時の流れをつかむ。 <新生児抱き人形を用いた演習> ○ クラス全体を2つに分け、全員が起立した状態で、抱き方に注意しながら順に人形を受け渡していく。 ○ 目標の確認をする。	1 新生児抱き人形（男女各1体ずつ）を提示する。 ○ 新生児抱き人形の抱き方と受け渡し方の説明をし、本時の活動の見通しがもてるようにする。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 幼児との関わり方について考えよう。 </div>			
25分	2 幼児体験をする。 <ロールプレイング> ○ 4人グループになり、教師が用意した2つのコーナー（横断歩道・遊び場）で体験をする。 ○ 3つの立場（親・子供・観察者）に分かれて演じる。 ○ 子供役は、チャイルドビジョンを装着して演じる。 ○ 気付いたことをホワイトボードに記入する。	2 生徒がスムーズに体験を行うことができるように各コーナーを回りながら適宜、助言や指導を行う。 ○ 生徒一人が、子供役を含めた2つの立場を担当できるようにする。 ○ 横断歩道は、左右からの車の往来に注意するように促す。 ○ 遊び場は、おもちゃの取り合いの様子を演じるように促す。	▽幼児の発達や生活の特徴を踏まえ、幼児とのよりよい関わり方について理解し、工夫している。 [観察・ワークシート]
10分	3 幼児目線の動画を視聴する。 <視聴覚教材> ○ 動画を視聴して、感じたことや考えたこと等を発表する。 ○ 幼児とよりよく関わるための注意点を確認する。	3 ロールプレイングで子供役として、実際に自分が体験したと照らし合わせながら、幼児の目線からの世界を撮影した動画を見るように促す。 ○ 生徒が記入したホワイトボードから、3つの立場（親・子供・観察者）を踏まえた注意点を抜き出して確認する。	
5分	4 本授業のまとめをする。	4 本授業のまとめとして、幼児の発達の状況や生活場面、幼児の興味・関心に応じた関わり方が大切であることを確認する。	

(1) ロールプレイング（横断歩道・遊び場）

横断歩道の場面は、廊下に養生用テープを貼って歩道に見立て、廊下の壁に自動車の絵を掲示して車が接近してくる状況下で歩道を渡るという設定にした。子供役と親役の生徒は、横断歩道を周囲に注意しながら渡っていく。遊び場の場面は、教室内にレジャーシートを敷き、その上に子供役の子供が上靴を脱いで座り、クレヨンと折り紙の好きな色を取り合うという設定にして、その様子を再現した。ロールプレイングは、4人グループで行い、親役1人、子供役1人、観察者2人として、それぞれ役割がわかるように名札をつけて演じることにした。ロールプレイは3分間とし、演じた後すぐに、それぞれの立場からの気づきをホワイトボードに記入させた。その内容をまとめたものが表2（横断歩道）、表3（遊び場）である。

子供役の子供からは、横断歩道の場面では、「下が見えないので歩きにくい。」「視野が狭いので、車が来ても見えない。」等の記述があり、チャイルドビジョンの装着によって幼児の視界の狭さを体感し、周囲が見えにくくなるという状況を理解することができていた。遊び場の場面では、「取り合うと全部が欲しくなった。」「わがままを言うのが楽しかった。」等の記述があり、夢中になって幼児を演じている様子が見られ、その結果として、子供の心情や特性が理解できていた。親役の子供からは、「歩幅を合わせるのが大変だった。」「子どもに気を取られて車の確認を忘れてしまう。」等の記述があり、横断歩道で子供に注意しながら安全に渡ることの難しさを実感している様子が見られた。遊びの場面では、子供が夢中になっている状況に対してどのように声をかければよいのかわからず、「けんかが始まると止められない。」「言うことを聞いてくれない。」等の戸惑いの様子が伺える。実際に授業中も、親役の子供が子供のにぎやかに騒いでいる様子を見ているだけで、何もできずに呆然としている姿が見られた。観察者からは、「子どもは身長が低くて車から見えない。」「声をかけてあげることが大切。」等の記述があり、親が子供に気を取られて周囲の様子に目配りができていない状況に気付いており、子供役と親役の双方の様子から客観的に見ることができていた。

表2 親・子供・観察者の立場からの気づき（横断歩道）

親	<ul style="list-style-type: none"> ・安全確認しなければならない。 ・子供に気を取られて、車の確認を忘れてしまう。 ・子供の歩くスピードに合わせてなければならない。 ・子供が急に走り出したりする。 ・子供の歩くのが遅い。 ・歩幅を合わせるのが大変だった。
子供	<ul style="list-style-type: none"> ・視野が狭いので、障害物が見えにくい。 ・視野が狭いので、車が来ても見えない。 ・下が見えないので歩きにくい。 ・目線が下がった。 ・背の高い人が見えにくい。 ・気を付けなければならないことが多い。 ・渡るのに時間がかかり、親に合わせるのが大変。
観察者	<ul style="list-style-type: none"> ・子供は身長が低くて車から見えない。 ・声をかけてあげることが大切。 ・子供は近くに親がいても見えていない。 ・言うことを聞かず車にはねられている子供がいた。 ・一度に二人の子供を見ると親が大変そう。 ・子供のお世話が大変そう。

表3 親・子供・観察者の立場からの気づき（遊び場）

親	<ul style="list-style-type: none"> ・意外とけんかの止め方が難しかった。 ・どうしていいかわからなかった。 ・子供のけんかには親が入りにくい。 ・全然言うことを聞いてくれない。 ・けんかが始まると、なかなか止められない。 ・どうやって声かけをするかを悩んだ。
子供	<ul style="list-style-type: none"> ・演じているつもりが、取り合うと全部が欲しくなった。 ・相手の物も欲しくなった。 ・わがままを言うのが楽しかった。 ・クレヨンを取り合う気持ちが分かった。 ・他の親が怖かった。 ・親は大変だと思った。 ・親は大きな声ですぐ怒る。
観察者	<ul style="list-style-type: none"> ・親がけんかを止めることができていない。 ・親は見ているだけで、けんかが進んでいた。 ・物を取り合っているとき、親が注意するのが大変そうだった。 ・子供はわがままだった。 ・親が困っていた。 ・子供は全然話を聞こうとしていなかった。

(2) 視聴覚教材（幼児目線の動画）

動画を視聴して、感じたことや考えたことを自由記述させた内容をまとめたものが表4である。動画では、幼児が市街地で独り言をつぶやき、時には歌いながら大人に混ざって歩いていく様子が映し出される。人混みに混ざって横断歩道を渡り、すぐ横を自転車が入り抜けていく中で歩き続け、そして最後に階段を上って駅にたどり着く。2分程度の動画であるが、幼児目線での撮影のため、視線が低く、幼児の頭がよく揺れる様子もよくわかり、幼児はどのように周囲が見えているのか、また周囲の大人が普段はどのように行動し歩いているのかを理解

表4 幼児目線の動画を見て感じたこと、考えたこと

<ul style="list-style-type: none"> ・左右だけではなく上下も見えていなくて危険。 ・周りの大人が大きく見える。 ・子供は同じことをずっとしゃべっていた。 ・何を話しているかわからない。 ・見えている範囲が狭い。 ・周りの歩いている人の顔が見えていない。 ・目線が低く、階段などをのぼるのがこわい。 ・自転車が来ても気づいていない。危ない。 ・周りの大人にぶつかりそうだった。 ・周りの人の歩くスピードがとても速い。 ・大人が持っている物に当たりそうだった。 ・横からくるものを全然見えていない。
--

できる。生徒の記述には、「見えている範囲が狭い。」「周りの大人にぶつかりそうだった。」「自転車が来ていても気づかない。危ない。」「大人が持っている物に当たりそうだった。」等があった。市街地を歩く際の幼児の視界を自分が体験したように感じ取ることができ、普段の生活の中で大人が周囲を注意しながら行動する必要があることや幼児と一緒に歩く際には、周りの安全確認が大切であることを理解することができたようである。

2. 授業の成果と考察

授業を受けることによって、乳幼児に対する生徒の意識がどのように変化したかを見るために、授業後にアンケート調査を実施した。調査内容は、乳幼児との関わりに対する興味・関心とその理由、乳幼児に対するイメージや印象の変化の有無と現在もっている乳幼児のイメージや印象についてである。調査実施時に欠席していた6名を除いた123名を分析対象とし、授業の前後で比較した。

(1) 乳幼児との関わりに対する興味・関心

授業前に実施した生徒の実態把握のためのアンケート調査と同様に、「乳幼児と関わるのが好きですか」、「乳幼児と関わりたいと思いますか」について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で尋ねた。その結果を授業の前後で比較したグラフを図1、図2に示す。

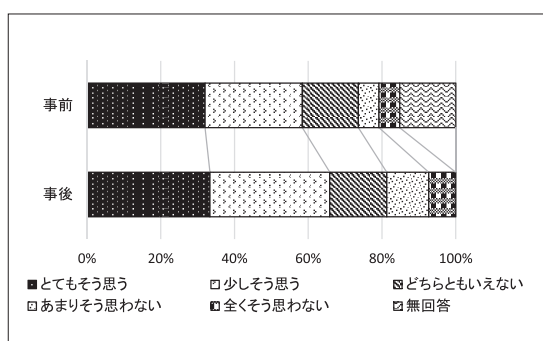


図1 乳幼児と関わることは好きですか？

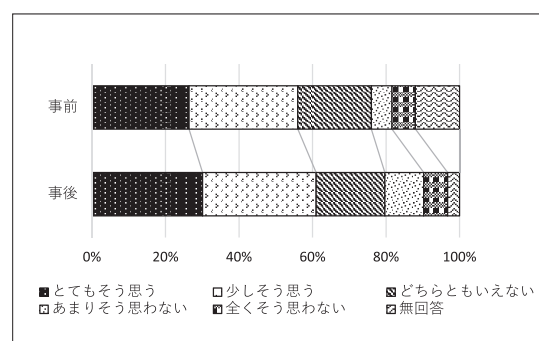


図2 乳幼児と関わりたいと思いますか？

「乳幼児と関わるのが好きですか」については、「とてもそう思う」、「少しそう思う」の肯定的な回答は、授業前58.4%であったのが、授業後は65.8%となった。「乳幼児と関わりたいと思いますか」は、肯定的な回答が授業前56.0%、授業後61.0%であり、どちらもわずかではあるが増加していた。無回答であった生徒の割合は、どちらの質問についても授業後に減少しており（関わるのが好きですか：15.2%減、関わりたいと思いますか：8.7%減）、授業を受けたことによって、乳幼児に対しての興味・関心が深まり、現実的に考えることができたことになったことと表れてはいると考えられる。回答理由の自由記述を見ると、肯定的な内容としては授業前と同じく、「かわいい」、「一緒に遊ぶのは楽しい」、「子どもが好き」等が多かったが、授業後には、「笑ってくれると嬉しい」、「自分が素直な気持ちになれる」、「自分にも子供の頃があったから」、「子供の動きや表情が面白い」等の回答があり、ロールプレイングや動画視聴等から子供の心情や様子を理解することができ、関わり方を考える中でこのような記述が増えたと考えられる。また、「今度は実際に子供と関わってみたい」、「一緒に遊んでみたい」という前向きな記載も見られた。否定的な内容としては、授業前と同じく、「うるさい」、「よくわからない」等が多かったが、授業後は、「世話をするのがめんどろ」、「わがまま」、「世話をするのは大変そう」、「幼児と関わるにはいろんな知識が必要」というより具体的な記述に変化している傾向があり、幼児の特徴を理解した結果であると思われる。

以上のように、授業後には、乳幼児との関わりを肯定的に考えるようになった生徒が6割を超えていたが、乳幼児との関わりは大変でめんどろであると否定的に捉えている生徒もかなりの割合で存在する。しかし、中学生が将来に親として、また大人として幼児と関わっていく存在となることを考慮すると、楽しくて面白いというプラス面だけを見るのではなく、大変で困難な面もあるということを知っておく必要があると考える。子供の特徴のプラス面とマイナス面の両方を十分に理解した上で、生徒が子供との関わりを好意的に捉えるようになることが望ましい。

(2) 乳幼児に対するイメージや印象の変化

乳幼児に対するイメージや印象は、授業前と比べて変化があったかについて尋ね、改めて現在もっているイメー

ジヤ印象を自由記述で求めた。イメージや印象が「変わった」と回答したのは、66名(53.7%)、「変わっていない」と回答したのは、57名(46.3%)であった。現在もっている乳幼児のイメージは、「子供の視野が思ったより狭く、大変」、「しっかり見ていないと危ない」、「関わる時は気を付けることが多い」、「自分達と同じ基準ではいけない」、「子供は周りを見ていないのではなく、視野が狭い」等があり、授業のまとめで扱った内容である。幼児とよりよく関わるための注意点(周りの安全確認をする、目線を合わせて話す、幼児の気持ちを大切にすること)に関する内容が多かった。また、「世話をするのは大変なのは分かっていたけれど、親目線で見ると大変だけど楽しかった」、「子育ては難しそうだけど本当に楽しい」という記述も見られ、子供と関わることの楽しさを授業で実感できたようである。イメージが「変わっていない」理由としては、「子供がもともと好き」、「にぎやか」、「かわいい」というプラスのイメージをもち続けているという回答がある反面、マイナスのイメージとして、「うるさい」、「よく泣く」、「けんかをよくする」、「世話が大変」等があり、乳幼児のイメージをマイナス面だけで捉えてしまっている点は残念である。また、「実際に乳幼児と関わらなければわからない」という記載も見られた。

以上のように、乳幼児に対して、「うるさい、わがまま、自分勝手」等のマイナスイメージだけをもっている生徒が授業後にも見られ、今後、検討が必要である。また、乳幼児と「関わるのが好きですか」、「関わりたいと思いますか」という質問に対しては、肯定的な回答が約6割であり、授業の前後で比較しても、授業後にわずかな増加が見られるだけであった。乳幼児に対して、もっとプラスのイメージをもち、積極的に関わってみたいという意識を生徒にもたせるためには、今回のような1時間の授業実践では時間的に不足であり、ロールプレイング後のまとめの時間として、クラス全体で共有する時間をもっと確保する必要があると考える。生徒同士の意見交換の場を設けて、親役はどうすればよいのか、どのような態度でどのように声をかけて対応をすればよいのかを考えさせ、そして再度演じる機会を設けると、より理解が深まると思われる。好ましい対応を学ぶことにより、実際の場面では自信をもって子供と関わる事が可能となる。

V まとめ

少子高齢社会の進展に伴う現状と課題を背景として、2003年に「少子化社会対策基本法」が制定された。この法律に基づいて政府は様々な対策を推進しており、2020年5月に第4次の「少子化対策大綱～新しい令和の時代にふさわしい少子化対策へ～」が閣議決定されている。その中では、結婚・子育て世代が将来にわたる展望を描けるように、経済的基盤の安定、働きやすい環境の整備、子育てに対する支援等の強化を図っている。一方で、児童虐待相談対応件数は年々増加しており、親からの虐待によって子供が亡くなるという悲惨な事件が後を絶たない。少子化をめぐる課題には、少子化対策としての施策の推進だけではなく、将来の親となる世代に子供を理解し思いやる心を育てることが必要である。そのためには、乳幼児と接する機会が減少している生徒に対して、学校教育の中で、育児に関する知識や技能を身に付けさせることが望まれる。家庭科の授業では、乳幼児の生活や関わり方に関する学習内容を扱うことになっており、中学校段階からは実際に、幼稚園、保育所、認定こども園などの幼児と触れ合い、交流の機会をもつことを求めている。しかし学校現場では、授業時間の確保や受け入れ先の確保、教員の荷重負担等の問題から、触れ合い体験実習を実施することが困難な学校も見られる。そこで、学校の事情等で触れ合い体験実習の実施が困難な場合を想定し、その代替となるような体験的な活動を取り入れた授業を考案し、実践によってその効果を検証することにした。

授業実践は、公立中学校において、2年生4クラスを対象に行なった。授業を考案するに当たっては、学習指導要領で示されている指導上の留意点と生徒の実態を考慮して、「乳幼児に対する生徒の興味・関心を引き出す。」、「乳幼児の特徴や関わり方などについて、体験を通して理解できるようにする。」、「幼児の実際の生活で起こると考えられる場面設定を取り入れる。」の3点に配慮した。生徒が体験する演習として、ロールプレイングと幼児目線の動画視聴を取り入れた。ロールプレイングは、2つの場面(親子が横断歩道を渡る場面、子供が遊び場でおもちゃの取り合いをする場面)を設定し、4人グループで役割分担(親役、幼児役、観察者)をして演じさせた。ロールプレイ後にそれぞれの立場で感じたことを共有することで、幼児の心情や特性を理解することができ、周囲がどのように対応すればよいかを考えることができていた。視聴覚教材として取り入れた動画は、市街地を歩く様子を幼児の目線から撮影した映像である。動画を視聴することで、生徒自身が街を歩いているように、幼児の視界を体験することができ、周囲の安全確認の重要性を実感していた。

授業の前後で、生徒の乳幼児に対する興味・関心がどのように変化したかを見たところ、残念ながら、授業後に興味・関心の高まりを示した生徒の割合がわずかに増えているに過ぎず、数値を大きく高めることはできな

かった。この理由としては、授業実践の時間が1時間と少なく、そのためにロールプレイングの演習を行った後に、生徒同士で感じたことや学んだことを共有する時間が十分に確保できなかったことが考えられる。親役、子供役、観察者のそれぞれの立場からの気づきをグループ内で、そしてクラス全体で共有する時間を十分に取り、その後、よりよい関わり方となるにはどうすればよかったのかを考えさせると、より理解が深まると思われる。今後の授業の改善点としては、演習後のまとめの時間の十分な確保がまず挙げられる。また、ロールプレイングで取り上げた横断歩道と遊び場の場面と同じことが、実際の生活の中ではどのように起きているのか、実際には幼児や大人はどのように行動しているのかがわかる映像があれば、自分たちの演技と比較ができて幼児に対する理解も深まり、生徒自身が同様の場面に遭遇した際に、積極的に関わるができるのではないかと考える。

現在の中学生は、少子化の影響もあって、日常生活の中で乳幼児と関わる機会は少ない。乳幼児のイメージを「小さくてかわいい」というプラス面だけで捉えている生徒もいれば、「うるさい、わがまま」というマイナス面だけで捉えている生徒も見られた。近い将来に親として、また大人として子供と関わり、そして育てていく立場となるには、乳幼児の特性を知り、プラス面とマイナス面の両方を十分に理解することが必要である。子供はかわいいだけの存在ではなく、子供のありのままの姿を受け入れることも重要である。そして、自分はどのように子供に声をかけ、どのように相手をすればよいかを考えるを通して、子供に対する愛情を育み、また、その中で自分自身の成長も感じ取ってほしい。子供と関わることを好意的に捉え、積極的に関わりたいと思えるような生徒を育てていきたい。今回の授業実践の内容をさらに改善し、授業の質の向上を目指していきたい。

参考文献

内閣府、「令和2年版 少子化社会対策白書 少子化の状況及び少子化への対処施策の概況」, 2020.

https://www.8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2020/r_02_pdfhonpen/r_02_honpen.html
(2020年9月15日アクセス)

日本学術会議 少子社会の多面的検討特別委員会、「少子社会の多面的検討特別委員会報告 少子社会の現状と将来を考える」, 2000. 5. 29

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/17.htm/1750.z.html> (2020年9月15日アクセス)

内閣府、「少子化社会対策大綱～新しい令和の時代にふさわしい少子化対策へ～」, 2020. 5

https://www.8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/pdf/r020529/shoushika_taikou.pdf (2020年9月15日アクセス)

厚生労働省、「平成30年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数（速報値）」, 2020. 8

<https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000533886.pdf> (2020年9月15日アクセス)

厚生労働省、「児童相談対応件数の動向について（令和2年1月～5月分（速報値）」）,

<https://www.mhlw.go.jp/content/000628642.pdf> (2020年9月15日アクセス)

文部科学省、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編』, 東洋館出版社, 2018. 2

文部科学省、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編』, 開隆堂, 2018. 3

文部科学省、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説家庭編』, 教育図書, 2019. 3

尾城千鶴・吉川はる奈, 「高等学校「家庭科」における保育体験学習の教育的効果と課題」, 埼玉大学紀要 教育学部, 59（2）, 2010, pp. 59-67

伊藤葉子, 「中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」, 日本家政学会誌, Vol. 58 No. 6, 2007, pp. 315-326

考藤悦子・片山美香・高橋敏之・西山修, 「家庭科保育領域における触れ合い体験学習の意義と課題」, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第6号別冊, 2016, pp. 113-122

台利夫, 『新訂ロールプレイング』, 日本文化科学社, 2003. 2

NPO 法人 CAP センター・JAPAN 発行, チャイルドビジョン,

http://cap-j.net/wp/wp-content/uploads/2015/03/dl_childvision2014.pdf (2020年9月15日アクセス)

Benefits of Experiential Activities in Junior High School Technical-Home Economics(Home Economics Field): The Desire for Classes that Help Students Consider How to Interact with Infants and Preschoolers

HAYAMI Takako^{*}, TAMAKI Chihiro^{**} and FUKUI Tomoko^{***}

As families grow more diverse in form and have fewer children, home life has changed. Now there are very few opportunities for junior high school students to interact with preschool-age children. Home economics classes could include opportunities to interact directly with those children. The aim in providing such experience would be to help junior high schoolers understand persons of a different generation than themselves, and develop compassion and kindness. Anticipating situations in which it would be difficult to provide childcare experiential activities in the school environment, this research consisted of classes that included hands-on activities like role-playing instead. The benefits were then verified.

To better understand the junior high schoolers, they were administered a questionnaire before the classes began. They were asked about their experience and interest in interacting with infants and small children. Then a one-hour class was given to four different classes of second-year junior high schoolers. Changes in the students following the class were analyzed in comparison with earlier answers. The results indicate that after the class, students were more interested in small children and had a better understanding of them. Additionally, role-playing gave students new awareness and made them think effectively about relevant matters during interactions with small children.

^{*}Department of Home Economics Education, Naruto University of Education

^{**}Former Graduate School of Education, Naruto University of Education

^{***}Hyogo Prefectural Kinjyo High School